

やませとまり

奥尻島東風泊遺跡

——道々奥尻島線整備事業に係わる記録保存の発掘調査概報——

1981

函館土木現業所
奥尻町教育委員会

やませとまり

奥尻島東風泊遺跡

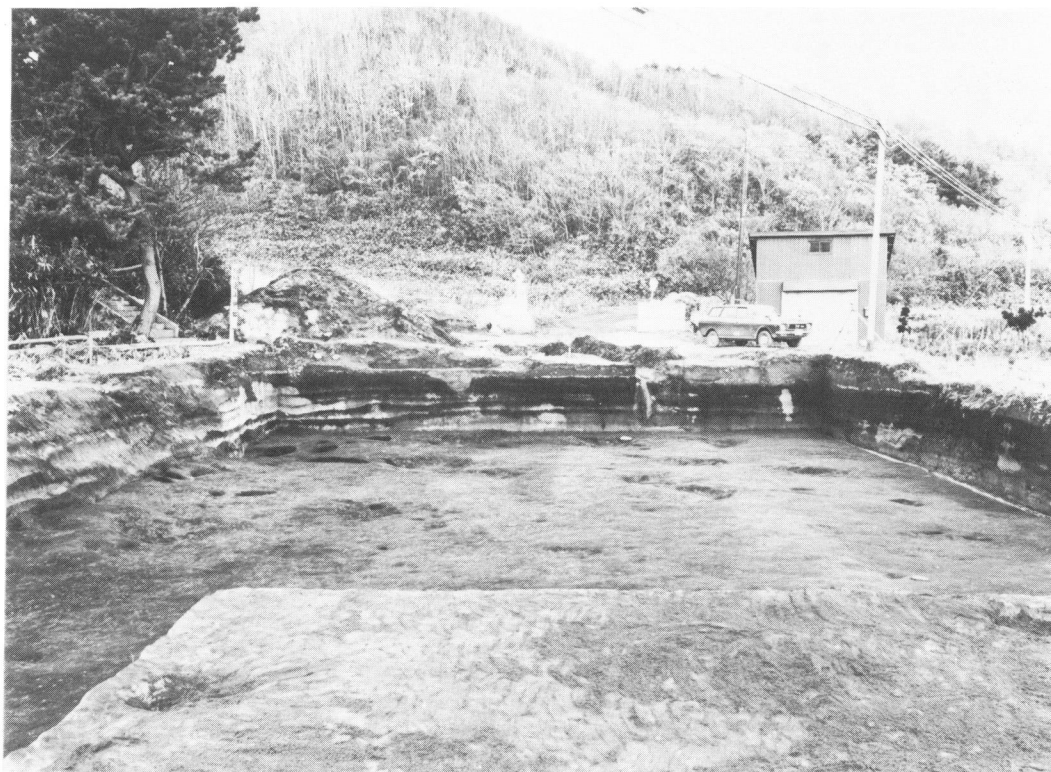
——道々奥尻島線整備事業に係わる記録保存の発掘調査概報——

1981

函館土木現業所
奥尻町教育委員会



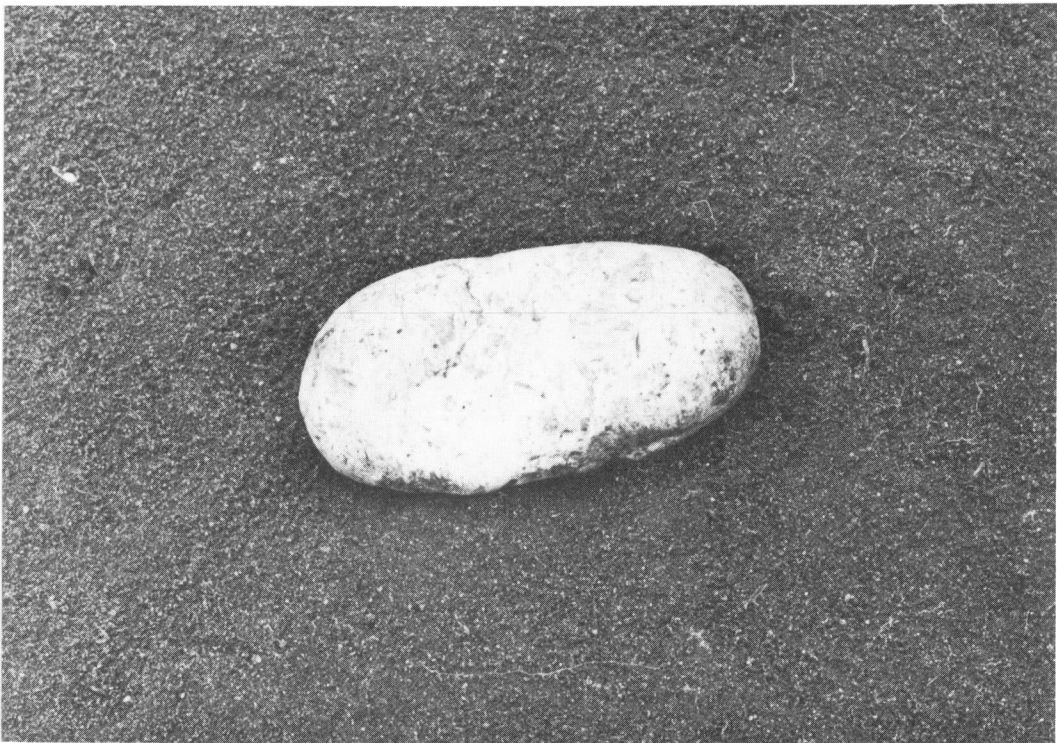
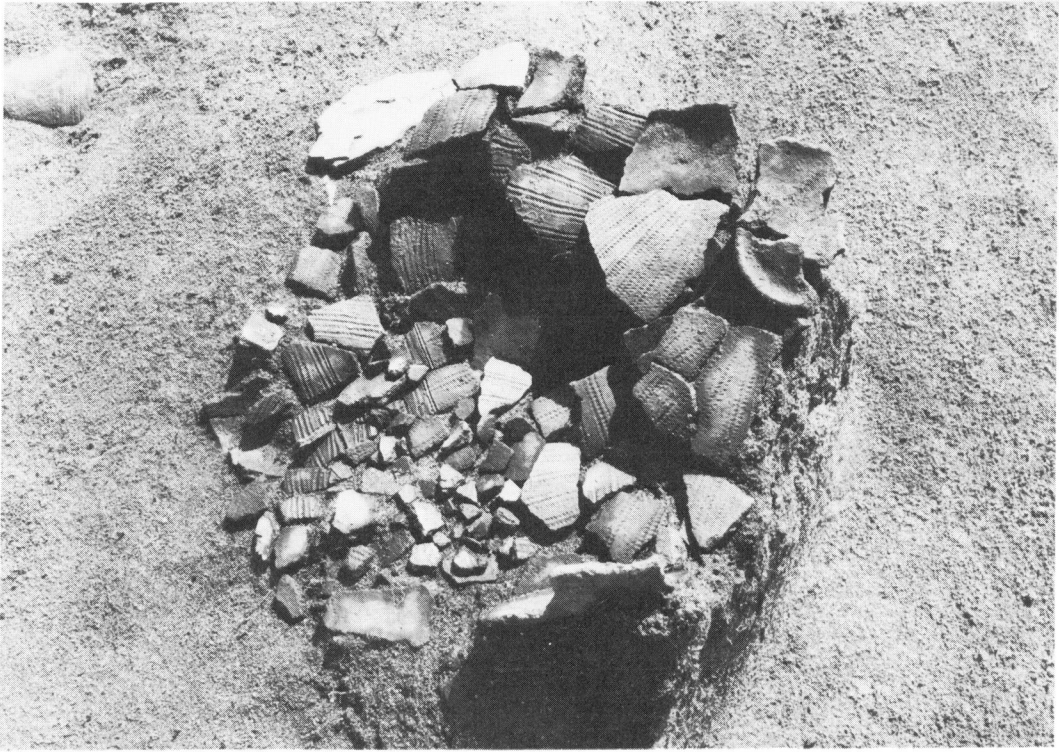
第1図版 川口左岸地点（現道下神社前発掘区）発掘調査前の状況。S.54
第2図版 川口右岸地点（輪島発掘区）発掘調査前の状況。S.55



第3図版 川口左岸地点（現道下神社前発掘区）発掘調査後の状況。S.54
第4図版 川口右岸地点（輪島発掘区）発掘調査後の状況。S.55



第5図版 川口左岸地点 遺物の出土状態 (1) 第Ⅲa海砂層出土の土器
第6図版 川口左岸地点 遺物の出土状態 (2) 第Ⅳa海砂層出土の黒曜石の剥塊



第7図版 川口右岸地点 遺物の出土状態 (1) 恵山式土器
第8図版 川口右岸地点 遺物の出土状態 (2) 窪み石



第1図 東風泊遺跡（川口左岸地点，同右岸地点）の位置

目次

I. はしがき	1
II. 東風泊遺跡の概要	2
III. 東風泊遺跡の土層構成	3
1. 川口左岸地点	
2. 川口右岸地点	
IV. 遺構	8
1. 川口左岸地点	
a) 炉址	
b) 井戸	
c) 土壇	
d) 竪穴様ピット	
2. 川口右岸地点	
V. 遺物	8
1. 川口左岸地点	
a) 土器	
b) 石器	
2. 川口右岸地点	
a) 土器	
b) 石器	
VI. あとがき	11

目 次

第1図	東風泊遺跡（川口左岸地点，同右岸地点）の位置	vii
第2図	東風泊遺跡（川口左岸地点，同右岸地点）付近の地形	3
第3図	東風泊遺跡川口左岸地点の古地形，平・断面	7

図版目次

第1図版	川口左岸地点（現道下神社前発掘区）発掘調査前の状況。S. 54	i
第2図版	川口右岸地点（輪島発掘区）発掘調査前の状況。S. 55	i
第3図版	川口左岸地点（現道下神社前発掘区）発掘調査後の状況。S. 54	ii
第4図版	川口右岸地点（輪島発掘区）発掘調査後の状況。S. 55	ii
第5図版	川口左岸地点 遺物の出土状態 (1)	iii
第6図版	川口左岸地点 遺物の出土状態 (2)	iii
第7図版	川口右岸地点 遺物の出土状態 (1)	iv
第8図版	川口右岸地点 遺物の出土状態 (2)	iv
第9図版	川口左岸地点（神社前）の標準土層	5
第10図版	川口左岸地点発掘区の古地形，海浜礫の状況	7
第11図版	川口左岸地点の遺構，土壌の検出状況	9
第12図版	川口左岸地点の出土遺物 土器 (1)	13
第13図版	川口左岸地点の出土遺物 土器 (2)	14
第14図版	川口左岸地点の出土遺物 石器	15
第15図版	川口右岸地点の出土遺物 土器	16

1. はしがき

この報告書は奥尻島の幹線道路である道々奥尻島線宮津・東風泊間の道路整備事業に起因する記録保存のための発掘調査、東風泊遺跡の昭和54年、55年度分概報である。

島内幹線の道路整備の計画は函館土木現業所によって逐年充実度を高めているが、それだけに埋蔵文化財との係わりも深い。昭和51年の青苗市街・空港間の整備に伴う青苗遺跡の発掘調査以来、今年度で6年目に入った。漸く最終年を迎えた由であるが、その間、絶えず文化財保護に深い理解を示し、発掘調査に十分な時間をさき、工事に優先させていただいた土木現業所関係者各位に深く感謝の意を表したい。

昭和53年6月、北海道教育委員会・中村福彦文化財保護主事による遺跡の分布確認調査がなされ、遺跡の範囲は東風泊橋より宮津に向い現道路添いに約150mの長さ、道路と海側の6～10mの等高線が接する部分で、中心は海洋神社前の現道から東の浜堤一帯という結果がだされた。また鉛直的には表面採集遺物やテスピットの層位から恵山文化期の単純遺跡で掘開深度は遺構を含めて1.1m前後、現道下の遺物包含層、遺構は破壊されていないと推測された。したがって、現道下の保存は事実上不可能であり、記録保存の発掘調査という方法がとられることになった。そこで道路閉鎖の事態を避けるため、東風泊橋から港に通ずる町道を利用して、道々の登坂口に抜ける迂回道路が検討された。ただ部分的に遺跡の中を通る難点があったが、他に良策はなく、50cmの盛土と撤去時に工事立会することにした。

昭和54年度の発掘調査面積は現道下と側溝部分1577㎡、期間は昭和54年6月11日より11月5日までの148日間と決定した。調査班の編成は青苗遺跡の調査員等が、そのまま引継ぐ形をとった。

調査班の構成は次のとおりである。

- ・調査委託者 函館土木現業所
- ・調査受託者 奥尻町長 越森幸夫
- ・調査担当者 日本考古学協会 佐藤忠雄
- ・調査員等

河野本道 駒沢大学・旭川大学講師

山田 忍 専修大学北海道短期大学教授

佐藤芳子 奥尻島青苗遺跡専従調査員

山田 勝 奥尻島青苗遺跡専従調査員補助

整理の段階では動物遺体の同定:早稲田大学・金子浩昌氏、カーボン測定:学習院大学・木越邦彦氏、花粉分析:北海道開拓記念館・山田悟郎氏、石質鑑定:地質調査所北海道支所・山口昇一氏、久保和也氏等の各位に御協力をいただいた。

発掘調査は円滑に進行したが、層を追うごとに新たな遺物包含層の検出が続出し、最終的に深度2.7mの間に6枚の文化層が確認された。これによって当初の掘開予定深度1.1mを大幅に上まわり、9月の時点で作業の遅延は決定的となった。ただ幸いなことにA～D 20区以南、東風泊橋までの間が表層に若干の攪乱された土器小片、石器剥片を出土したのみで河床礫となったため、発掘面積は当初の凡そ半分の774㎡に縮少された。しかし、排土量では当初の1403.53㎡を103.07㎡上廻っており、実質15日の延長になった。

昭和55年度の発掘調査は川口左岸地点神社前発掘区の現道北330㎡を4月12日より6月8日まで、川口右岸地点輪島発掘区240㎡を9月1日より10月15日に亘って実施した。整理作業は昭和55年12月14日より昭和56年3月31日まで行われ、基本的なものを終了した。

昭和56年度の発掘調査は4月15日より7月27日の間、川口右岸地点輪島東発掘区(現道沿い)785.75㎡を対象に実施の予定である。

Ⅱ．東風泊遺跡の概要

奥尻島は北海道渡島半島の西方海上およそ20kmにある環海の離島である。行政上では桧山支庁に所属し、1島、1郡、1町を構成する。人口約6400人、基幹産業はイカ、ホッケ、マス、アワビ漁を主とする水産業で、近時は酪農の振興も注目されている。島への交通は海路で江差・奥尻間61kmと青苗間59kmに東日本フェリーの定期便があり、夏に瀬棚・奥尻間43kmに季節便が就航し、空路で札幌・函館・奥尻間に日本近距離航空のツインオッター機が通年運行している。

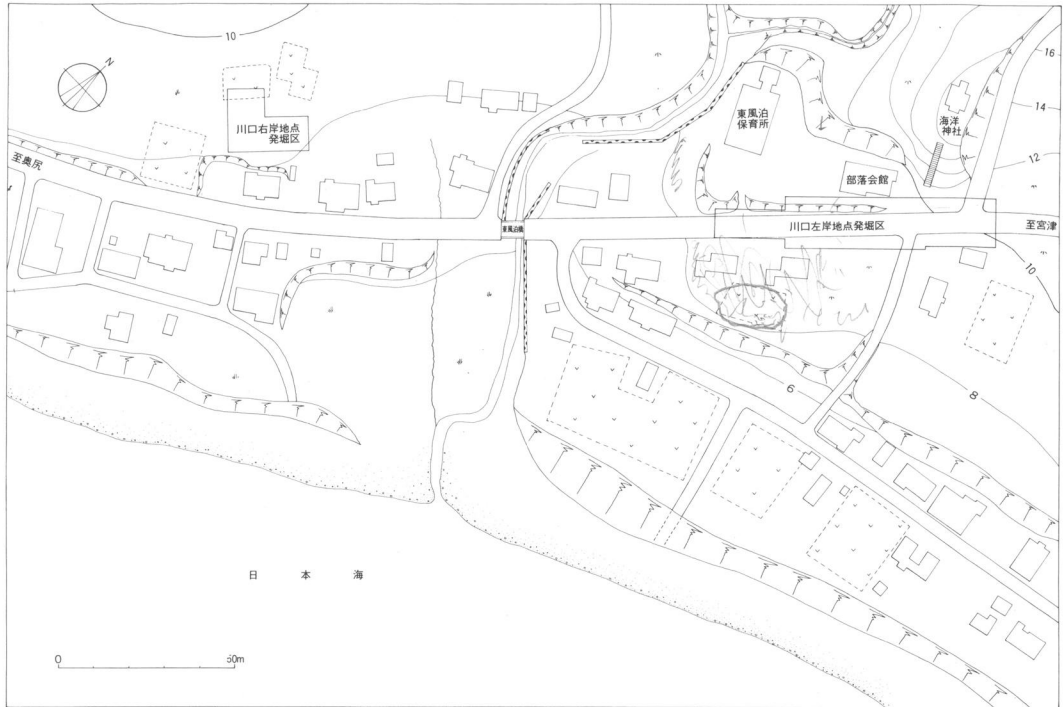
島の大きさは東西11km、南北27km、島周84km、面積143.27㎡の広さで、平面観は南北に長辺をもつ三角形に近く側面観は全般に低平に見える。分水界は西に偏しており、最高地点は神威山の584.3m、南東から東岸に亘り顕著な海成段丘が発達している。この段丘は瀬川秀良氏によって標高580～520mの島頂面から標高4mの青苗岬面間が神威山Ⅰ面、神威山Ⅱ面、青苗川面、フケ歌沢面、松江Ⅰ面、松江Ⅱ面、赤石面、米岡面、寺屋敷面、青苗岬面に10区分されている。

東風泊遺跡は奥尻島の東岸、北緯42° 12' 57"、東経 139° 32' 34" に位置し、奥尻町市街地より道々奥尻島線を約4km北上した地点にあり、東風泊部落の中央を横切る無名川を河口から100mほど遡った左右両岸に所在する。対岸は大成町の平浜で、晴天時には漁村の屋並みが眼前にみられる。東風泊はかつて享和年間に幕府がオットセイ取方役人派遣のため番所を設置したところで、島内では風当りの弱い、数少ない居住適地の一つである。

地形は西に球島山369.7mがあり、東に青苗川面の海成段丘が大きく広がって球浦牧野を形成する。そしてその東端標高200mほどに海蝕崖があり、約50°の急斜面で遺跡の沖積面と連続している。北は標高80～100mにや、平坦な米岡面があり、山裾は緩やかに西に傾斜し、青苗川面と米岡面との山間を開折して、無名川が流路を東南にとって海に注いでいる。即ち、遺跡は北西面の山を背に、川口を中心に東南に発達する扇状地にある。地質基盤は右岸が角閃安山岩およびデイサイト火砕岩からなる青苗川層、左岸が砂岩および泥岩からなる釣懸層である。なお青苗川面、米岡面の海成段丘は礫・砂・粘土によって構成されている。

遺跡の範囲は扇状地のほぼ全域と云ってよく、標高10m以下、4m以上の浜堤の沖積海砂地にある。現在、人家の殆んどがこの面に建っている。また標高10m以上18mの部分では飛砂の堆積はなく、青苗川層または釣懸層の風化土壌である。

この遺跡は昭和29年、市立函館博物館の石川政治、千代肇氏らの調査で確認された。「一遺跡は標高十米で砂丘の中間部を村道がかいさくして、このかいさく面に遺物が散在している一」、「一いわゆる北海道の縄文と云われる土器群のものである一」と述べられており、地勢や出土遺物から、その地点は本調査の川口左岸地点の海洋神社前付近と思われる。また、その後、経緯は明らかでないが球浦遺跡の確認が遺跡台帳に登録されている。それによれば一球浦より東風泊に向う道路の左側で、球島山の山麓、東風泊川の右岸で近くに和入墓地がある。標高18m付近から晩期の土器10数点採集、(標高18mという道路より約120m奥に入ることになるので8mの誤記であろう。)と記載されており、本調査でいう東風泊遺跡川口右岸地点にあたる。球浦遺跡の名称を踏襲しなかったのは、その命名が多分、字境界線が部落の中央にある東風泊橋であり、南が球浦、北が宮津となっていることから、単に字名を冠したものと思われること、また、球浦管内には周知の仏沢遺跡、同2遺跡があり、球浦遺跡の南にも隣接して擦文期の遺跡が存在する可能性があるなど、混同を避けるうえからも適当な呼称とはいえないなどの理由によるものである。そこで本調査より、球浦遺跡を東風泊遺跡川口右岸地点、旧来の東風泊遺跡を東風泊遺跡川口左岸地点と改称することにした。



第2図 東風泊遺跡（川口左岸地点、同右岸地点）付近の地形図

Ⅲ．東風泊遺跡の土層構成

1. 川口左岸地点

海洋神社前発掘区の層位は現道路を中心に用地境界沿いに設定された細長い発掘区全面に過去数次に亘って路盤掘さくがなされ、切込み碎石による整形が行われているので、Ⅰ～Ⅳ層を欠層するところが多い。また、側溝外では古い時期の道路工事による盛土層が見られる。全般に堆積は秩序よく、Ⅰ～Ⅳ層がほぼ良好な状態を示している。つぎに標準土層の観察をもとに、各層の大略を述べる。

1. 東風泊左岸地点の標準土層の概説

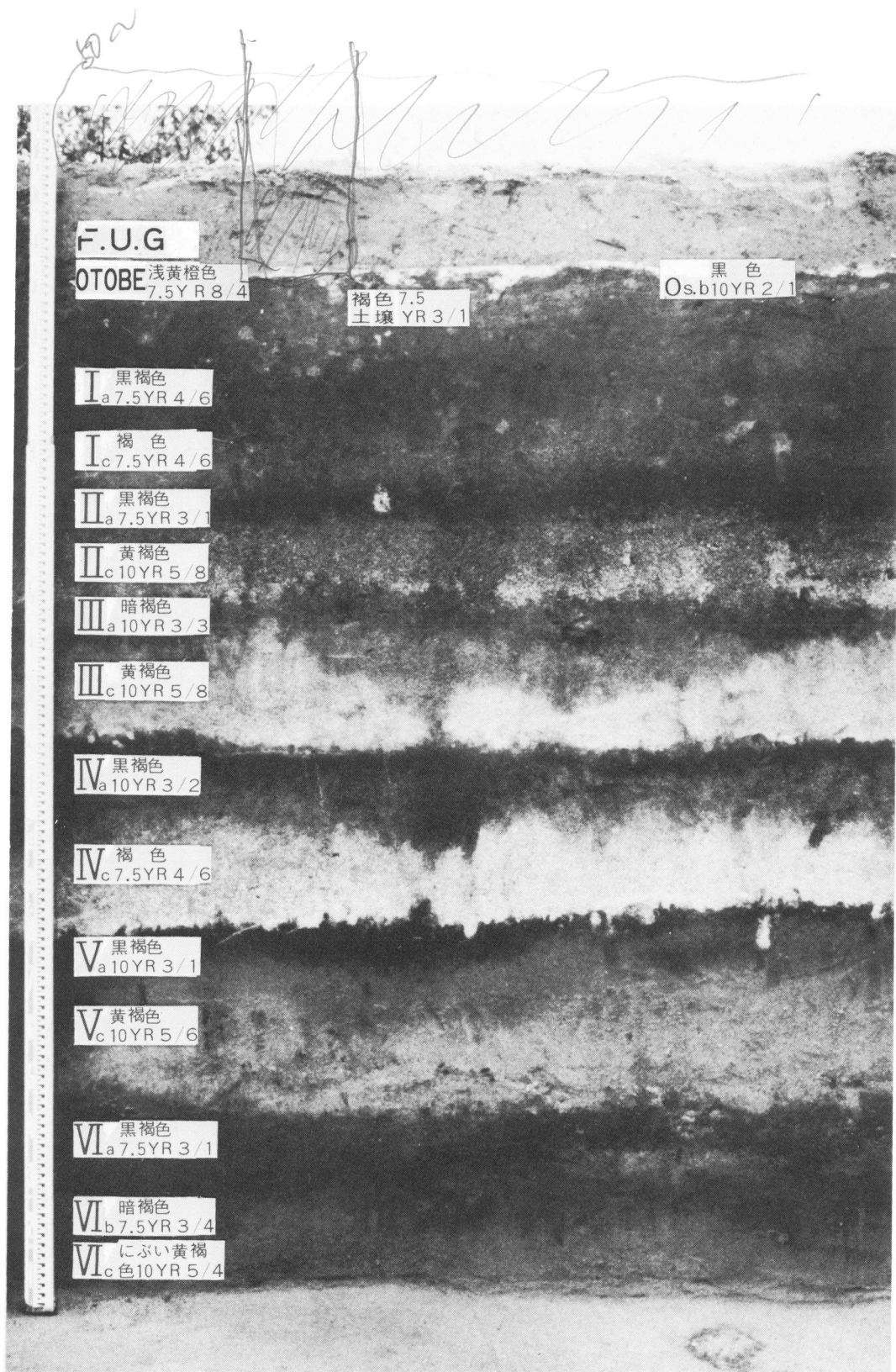
- F. U. G層 盛土層** 道路開さく時の盛土地盤で、数種の異なる土壌を密圧したコンパクトな土層である。
- Ⅰ層 波島大島 a層** 波島大島の火山灰層で1714年噴火の降下堆積物である。奥尻全島の地表を被覆する腐植を含む砂土で、土色は黒褐色ないし灰褐色である。層厚は5cm～30cm。
- Ⅱ層 乙部層** 奥尻全島に堆積している火山灰層で、浅黄橙色ないし黄白色の砂土。層厚は3cm～10cmである。
- Ⅲ層 波島大島 b層** 乙部層の直下に堆積する火山灰層で、腐植に富む真黒の壤土である。層厚1cm前後の薄層であり、明確でないところもある。青苗遺跡で山田忍氏によりOsbと命名されたものである。
- Ⅳ層 褐色土層** 米岡遺跡第5層の成因不明の土層に該当する火山灰層である。駒ヶ岳の層に密接して堆積する。奥尻島での駒ヶ岳の層の分布は松江以北に確認されていないが、両層の時間差は殆んどないものと考えられる。共に直下に恵山式の文化層が存在する。暗褐色の砂壤土、層厚は10cm前後である。

- V層 第1海砂層 飛砂が集積した浜堤で、淡褐色の粗粒な海砂層である。層上部は腐植を含有して黒褐色になっており、下部は上部から溶脱してきた鉄分により褐色化している。層厚は30cmないし45cmである。主として上部に恵山式土器を包含する。
- IV層 第2海砂A層 黒褐色の粗粒な海砂層が集積する浜堤である。層上部は黒色に近い、第1海砂より腐植に富んでいる。層厚は20cmないし30cmである。縄文晩期の遺物を包含する。
- VII層 第2海砂C層 黄褐色の細粒な海砂層である。腐植を含まず、砂粒はAより若干、粗い感じがする。層厚は10cmないし30cm、遺物を包含しない。
- VIII層 第3海砂A層 黒褐色の細粒な海砂層である。淡黒褐色に腐植しているが、風化が進んだのは短期間らしい。層厚は8cmないし20cmで海に向って厚い。縄文後期末葉の遺物を包含する。
- IX層 第3海砂C層 黄褐色の細粒な海砂層で、C-12区にピッチの細い連痕が砂紋を残している。層厚は7cmないし20cmの浜堤である。遺物を包含しない。
- X層 第4海砂A層 黒褐色の細粒な海砂層で多量の腐植を含有している。C-12区の砂紋は更にピッチの細い連痕となり、層上面は不規則に波状する。層厚は8cmないし25cm。縄文後期中葉の遺物を包含する。
- XI層 第4海砂C層 褐色の細粒海砂層で、X層同様の砂紋があり、不規則に波状する。層上半部は遺物を包含しないが、下部になるにつれ遺物を包含するが、量的には少ない。層厚8cmないし20cm。
- XII層 第5海砂A層 黒褐色の海砂層で、本層でも上面が小さく波状するところがあるが、X、XI層のように顕著ではない。ピット、焼土などの遺構があり、遺物の物量も多く、他層に比して安定した生活址面である。層厚は10cm～65cmで、北東の海側に増幅している。縄文後期中葉の遺物を包含する。
- XIII層 第5海砂C層 黄褐色の細粒の海砂層で、層厚は20cm前後、層上半部は遺物を含まないが、下半部にXVI層の一部の遺物が出土する。
- XIV層 第6海砂A層 黒褐色の細粒海砂層である。層は水平を保っており、密圧されたように硬い。層厚は15cmないし25cm。縄文後期初葉の遺物を包含する。
- XV層 第6海砂B層 暗褐色の粗粒海砂層で層厚は100cm前後、遺物を含まない。
- XVI層 第6海砂C層 にぶい黄褐色の粗粒海砂層で、層上面に花崗閃緑岩、玄武岩の海浜礫が集積している。恐らく本層が基盤で釣懸層にのるものと思われる。

川口左岸地点の土層は、縄文海進時の生成と見られる第6海砂層を基盤として、海退によって生成された5層からなる浜堤と火山の降下堆積物に由来する3層によって構成されている。このように幾層もの浜堤生成がなされた原因は、遺跡の立地する後背の山が壁となり、東風を通過させなかったことによるが、この浜堤面が居住適地として使用されたのは、海砂そのものが、風によって吹き上げられ、海岸を離れると急激に湿気を帯びる性質をもっており、風力が衰えて植物が生育しやすい状況になり、地表面が固定され、生活面としての使用が可能だったからであろう。各海砂層の植生は山田悟郎氏によって分析結果が得られており、中でも第2海砂A層から栽培種のソバの花粉が検出されたことは、その層の展開面の活用という点からも注目される。

なお実測した土層断面は発掘区の長辺にB-9～21区、D-9～26区の北西面とE-9～21区の南東面と短辺B～D-11区、B～E-13区、B～E-15区、B～E-17区、B～E-19区、B～E-20区の北東面に計9列とってある。

また第1海砂A層、第3海砂A層、第4海砂A層、第5海砂A層出土の木炭資料4点と第5海砂A層出土の土器の表面に付着した残滓炭化物資料1点のC-14年代測定を木越邦彦氏に依頼してあり、



第9図版 川口左岸地点（神社前）の標準土層

近くその結果が得られるので、各層が生成され時期や遺物の編年に期待がよせられる。

2. 川口右岸地点

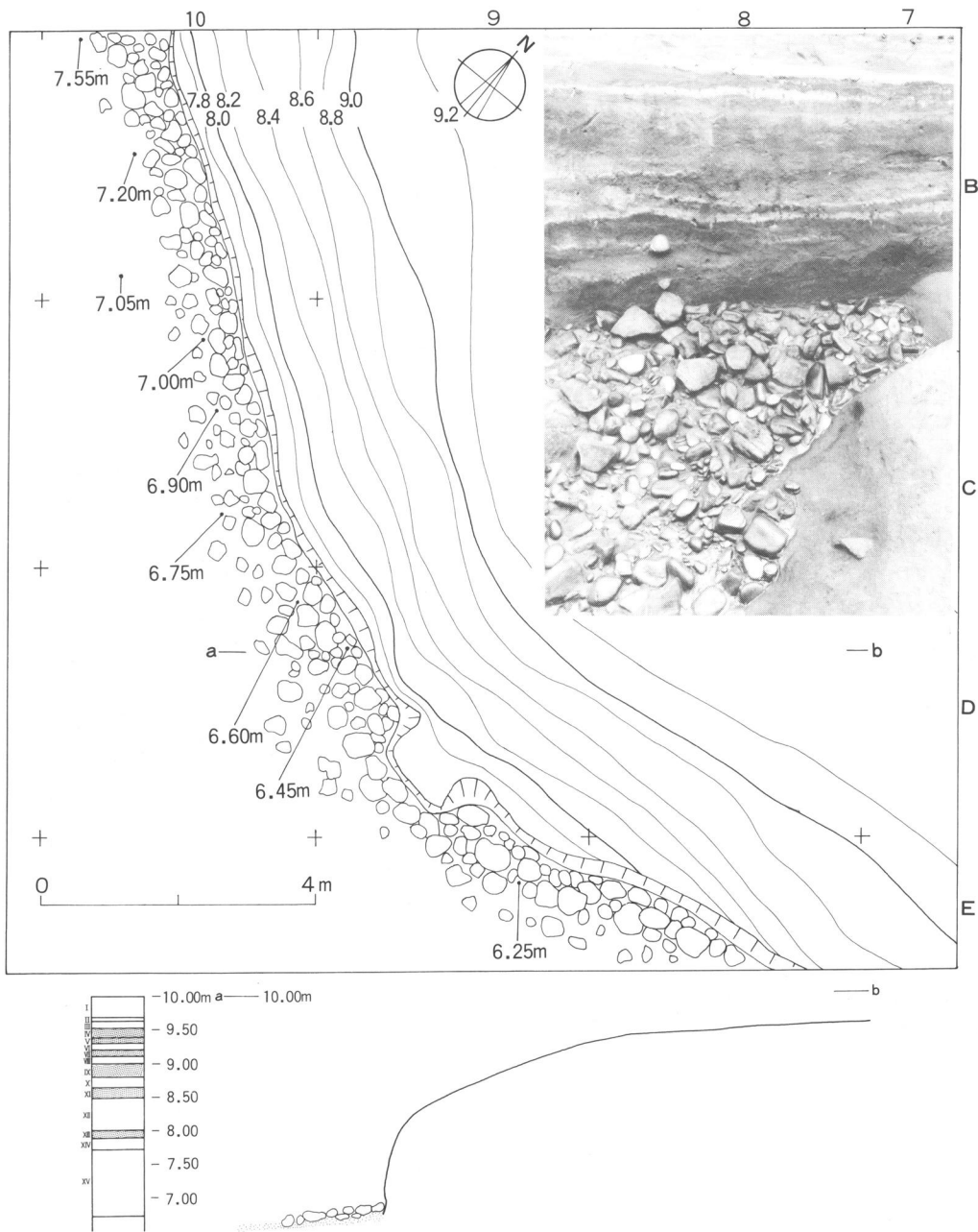
輪島発掘区は道々と平行するL字形で、神社前発掘区と同様の成因による砂丘、いわゆる浜堤である。現状は畑地で比較的平坦な面が南に広がりており、その先端は東風泊橋の南約250m付近にある無名川の古い時期の氾濫原あとと思われる低地溝に消える。浜堤形成前の発掘区の微地形は、恐らく舌状形で、ゆるく海側に伸びる山裾だったのではなかろうか。発掘区の標高は8m強で神社前発掘区と殆んど変わらないが、見掛けでは神社前発掘区の方が低く感じられる。

土層の堆積状態は北東の地傾斜のあるところで被覆が薄く、乙部層下で直ちに河床礫となる以外、浜堤の平坦部では水平堆積の状態を保っている。人為的攪乱は耕作による乙部層の削取が一部にあるほか、抜根によるものが4ヶ所に認められた。標準土層の観察は大略つぎのとおりである。

2. 東風泊右岸地点の標準土層の概要

- I層 渡島大島 a層 灰褐色7.5YR $\frac{5}{2}$ の砂土で腐植を含んでおり、畑地としては良好な状態にある層厚は15cm前後。
- II層 乙部層 浅黄橙色7.5YR $\frac{4}{4}$ の砂土で、噴出源不明の火山灰である。奥尻島対岸の渡島半島西南部日本海側に分布し、乙部町周辺に最も厚く堆積するとされていたものであるが奥尻島ではそれ以上に厚いことが確認されている。このことから奥尻島神威岳が噴出源ではないかとの推測もなされている。層厚は7cm前後。
- III層 褐色土層 暗褐色7.5YR $\frac{3}{5}$ の砂壤土である。軽い土壌で火山灰のように見えるが、また堆積していた火山灰が雨水により削剝され再堆積したことも考えられるとしている。山田忍のいう成因不明の土層である。層厚10cm。
- IV層 第1海砂A層 灰黄褐色10YR $\frac{5}{2}$ の砂土である。左岸地点より腐植に乏しい。層の上半にスギナの地下茎が成育してみられ、恵山式土器が包含されている。層厚6cm前後。
- V層 第1海砂B層 にぶい黄褐色10YR $\frac{5}{4}$ の砂土である。層の下半部より恵山式土器を出土する。層厚15cm前後。
- VI層 第1海砂C層 灰黄褐色10YR $\frac{5}{2}$ の砂土で層厚3cm、遺物を包含しない。
- VII層 第2海砂層 黄灰色2Y $\frac{5}{4}$ の砂土である。層厚7cm前後で全般に古いタイプの恵山式土器を出土する。
- VIII層 第3海砂A層 黒褐色10YR $\frac{3}{4}$ の砂土で、上部に恵山式および晩期の色彩の強い土器を出土する。層厚5cm。
- IX層 第3海砂C層 にぶい黄褐色10YR $\frac{5}{4}$ の砂土で、7cmの層厚。以下、第4海砂A層、褐灰色10YR $\frac{4}{4}$ の砂土、同C層、にぶい横橙色10YR $\frac{4}{4}$ の砂土と続くが、何づれも遺物を含まない。

なお、この層位は昭和55年調査の浜堤平坦面のものであり、昭和56年に予定している標高7～9mライン（現道々レベル）の調査で、第4海砂層以下、縄文後期に至るまでの層序が明らかにされるはずである。



第3図 東風泊遺跡 川口左岸地点発掘区の古地形、平・断面
 第10図版 川口左岸地点発掘区の古地形、海浜礫の状況

IV. 遺 構

1. 川口左岸地点

検出された遺構に近現代の炉址および井戸と縄文後期の土坑および竪穴様址がある。

- a) **炉址** D-9～D-10区に検出された。Ⅱ層の乙部層をⅤ層まで50cm掘込んでいる。底に約10cmの木炭の層があり、その上に焼けた6cm～10cmの円礫が40個ばかり認められた。平面は直径1m70cmの円形、断面は鍋底形である。
- b) **井戸** D-10～D-11区において検出された。Ⅳ層上面に落ち込みがあり、深さはⅩⅤ層に達している。穴底に30cm前後の転石が敷かれており、充填土中に陶器片が混在している。
- c) **土坑** B-12, 13, 14区のⅩⅡ層から3基検出された。
- 1号土坑** B-12区検出のプランは、ほぼ円形で黒色砂層Ⅴa層から掘り込まれ、褐色砂層Ⅵb層が坑底になっている。坑底からの壁の立上りは若干丸味を帯びながら垂直に立上る。坑上部に大小14個の配石があり、縄文後期中葉の土器、石器が検出された。遺物には周辺から流れ込んだものがあるようだ。坑底からの遺物の出土はない。(第10図版)
- 2号土坑** B-13区検出のものは長楕円で北東がやや幅広なプランになっている。掘り込みは前例同様、黒褐色砂層Ⅴa層からで、坑底も褐色砂層Ⅵb層である。配石は坑上に3個の山石と2個の小円礫がのっている。坑の従断面は舟形様、横断面は底に細まっている。遺物は南西端の坑底に密着して、縄文後期中葉の土器2個体が復元可能な状態で出土した。(第10図版、第7図版7, 11)
- 3号土坑** B-14区検出のプランは不規則な長楕円形で、長軸両端が角ばっている。掘り込みは黒褐色のⅤa層からでⅥa層が坑底になっている。配石は坑内に可なり大型の山石が9個ぎっしり詰込まれている。坑は浅く、鍋底状、遺物は配石上面より3点の土器片を出したのみである。(第10図版)
- b) **竪穴様址** D-12～13区にかけて検出された。Ⅹ層の第4海砂A層を掘込んだもので長径が2m50cm、短径が2mの半円状の落ち込みである。壁は10cm前後の高さで、ピット内は平坦であり、2箇所に直径40cm、深さ21cmの窪みがある。柱穴と思われるものが、壁沿い内に7個、外に8個ある。出土遺物は縄文後期の土器小片である。

2. 川口右岸地点 現在まで遺構の検出はない。

V. 遺 物

1. 川口左岸地点

a) 土器

前述の層位のうち、表層、Ⅰa、Ⅱa、ⅢaⅣa、ⅤaⅥa各海砂層から縄文時代、続縄文時代、擦文時代のものが出土した。これらは次の4群に分類することができる。

I群土器 縄文時代後期に属し、渡島半島を中心に分布する初葉のもの、汎全道的に分布する中葉のもの、渡島半島に局部的に分布する末葉に位置するものである。

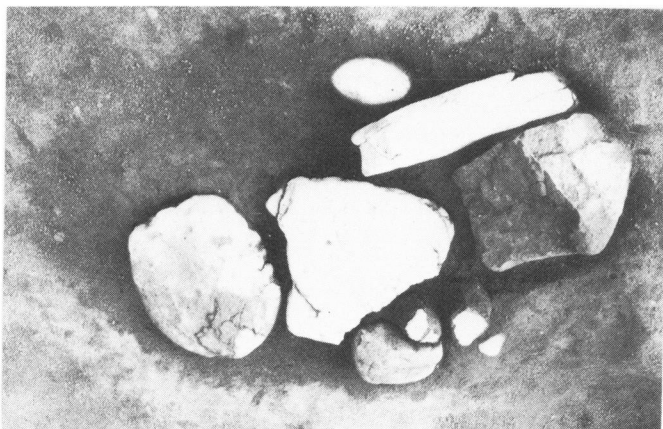
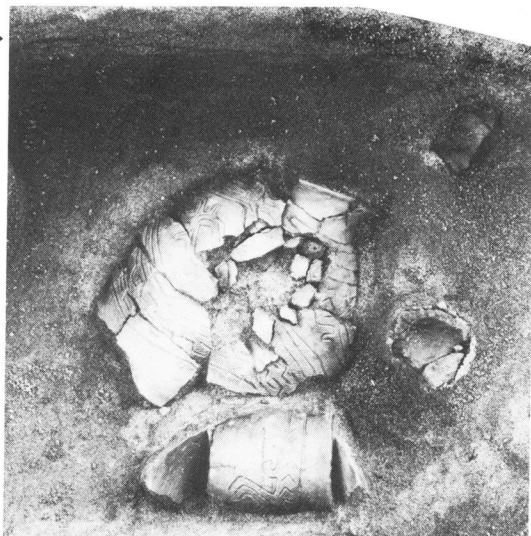
II群土器 縄文時代初期に属し、渡島半島を中心に分布するものである。

III群土器 続縄文時代後期に属し、主として道南地方に盛行するものである。

IV群土器 擦文時代に属するものである。

更に次の各種に細分することができる。

B-13区第V a海砂層上面検出の土壙 ▶



◀ B-14区第V a海砂層上面検出の土壙



◀ B-12区第V a海砂層上面検出の土壙

第11図版 川口左岸地点の遺構，土壙の検出状況

I 群土器

1 類 a 無文の素地で口縁に 2 本 1 組の蛇行状沈線文を横帯させ、それにより胴部に数条の蛇行状懸垂沈線文を施文した細長い円筒形の土器でいわゆる涌元式と呼ばれているものの 1 タイプ。

(V Ia層) b 地文の斜行縄文に交叉する。斜位の組紐圧痕文を等間隔に周回させたもの。

2 類 a 地文の縄文に沈線による曲線、平行沈線文、ㄥ状文と磨消縄文による入組文の施文されている大湯式土器の特徴を具備するもの。

(V c層) b 地文の縄文に沈線による曲線文、楕円文、平行沈線文、磨消縄文が施文されている深鉢形土器で、文様帯は胴部上半。入江 A 式の 1 タイプ。

c 地文の縄文に斜位の沈縄文を施文したもので、口縁が山形に分化し、頸部の磨消縄文帯で口縁部と胴部の文様帯を区分しているもの。

b 地文の縄文に S 字状、曲線状沈線文を施し、磨消縄文による三ヶ月状文と頸部の多段の沈線文を特徴とする文様帯が胴部上半にあるもの。

e 斜行縄文を地文とし、口縁上部に 1 条の圧縄文を巡らしたもの。

3 類 a 地文に縄文のあるものと無いものとあるが、ペンチ様に描いた沈線文を中心に、く状、) 状、ㄥ状の沈線文を施したもの。口唇部、口縁部に貼付粘土紐による装飾の有るものもある。

b 地文がなく、平行沈線文とㄥ状沈線文の施文されたもの。

c 口縁部と胴部に広い磨消縄文帯を残し、縄文を地文とする文様帯に連続波頭沈線文をめぐらしたもので、口唇部、口縁部に貼付粘土紐による装飾のあるもの。

d 無文の素地に直線的沈線文によって描出された隈手に、一定幅をとったそれと平行する沈線文を添えた文様で、一定幅の中に楕状工具による浅い搔痕の施されているもの。

e 縄文を地文とし、平行沈線文、円状、楕円状沈線文、磨消縄文の施されているもので、多くは口頸部に磨消帯をもつ。また平行沈線文は口縁部、肩部に多段に施文され、2 本を (,) で横長の S 状にくくるものが多い。

4 類 a 縄文を地文とし、文様に直角三角形に近い山形沈線を重ねめぐらした連続鋸歯状文、波頭沈線文を抽象化したと思われる、シヤチの背びれに似た構図の沈線文、平行沈線文がある。またㄥ状沈線文の抽象化とも見られる構図もあり、構図内は何れも磨消手法がとられている。器形は磨消帯の頸部から朝顔形に開らく器口の深鉢形で、口縁は 10～11 箇所突起をもつ低い山形に分化する。いわゆる手稲式土器の代表的タイプである。

b 地文の縄文に多段の平行沈線文を施し、それを縦位、斜位の沈線文で切るもの。

5 類 a 斜行線文を地文とする。文様帯は器高の 1/3 と狭まり、横位の S 字状沈線文が口縁上部に施され、単純な入組文の上下を平行沈線文で区切られた磨消帯が見られる。口縁に三つ山の小突起がある。宮戸 III b 式に類する土器である。

II 群土器

1 類 a 地文に斜行縄文を施し、口縁上部に爪形文を 2 列周回させたもので、上ノ国式土器である。

b 地文は斜行縄文で口縁部を磨消し、その上下を 2 本の平行沈線文で区切り、入組文を沈線文で描出している。大洞 B 式土器に相当するものであろう。

III 群土器

A 1 類 口縁部に 2 条の横帯縄文があり、その条間が磨消され、外からの円形刺突文が横位に施されている。

A 2 類 A 1 類の円形刺突文が内から施文されたもの。

A 3 類 磨消縄文、横帯縄文、縞状文、沈線文、列点文の施文されているもの。

IV群土器

1 類 擦文土器である。

b) 石器

出土した石器の種類は1.石鏃, 2.石錐, 3.石匙, 4.搔器, 5.石斧, 6.不定形剥片石器, 7.窪み石である。これは出土層位, 形態によって, いくつかに分けることができるが, 詳細は紙面の都合上, 本報告にゆずることとする。

2. 川口右岸地点

a) 土器

第1海砂A層, 同B層, 第2海砂層から, それぞれタイプの異なる恵山式土器を出土している。昭和55年調査中間時点で, 大まかに次の3類に分けることができる。

III群土器

B 1 類 地文に斜行縄文, 直行縄文を施し, 頸部に幅広で直立した無文帯をもち, 数条の平行沈線文, 連弧沈線文, 押引き文のあるもの。

B 2 類 地文に直行縄文を施し, 頸部に幅広で直立した無文帯をもち, 多段の平行沈線文と列点文のあるもので, 口縁が小さく沈状突起をなすもの。

B 3 類 a 横帯縄文, 磨消縄文, 縞縄文, 平行, 山形, 沈状沈縄文の施されているもの。(第15図版)

b 横帯縄文, 磨消縄文, 撚糸圧痕文, 単純な擬縄帯, 縞縄文の施されている後北式土器。(第15図版)

b) 石器

石器は1.石鏃, 2.搔器, 3.ナイフ様石器, 4.石斧, 5.窪み石の5種が出土している。このなかで窪み石が特に注目される。正面と背面の長軸上の2~3箇所に近い窪みを穿ち, その両側縁に細い縦溝が5~6条平行するものである。この種のもは米岡第2遺跡の恵山式土器に1例, 伴出したことがあり, 外では栄浦第2第13号竪穴六号住居址で, 磨り石として確認されている。本地点での出土例は13個あり, 石器組成でも大きなウエイトを占めている。(第8図版)

VI. あとがき

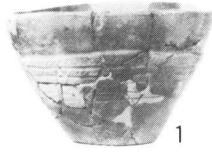
以上が東風泊遺跡川口左岸地点神社前発掘区, 同右岸地点輪島発掘区の昭和54年, 55年度分の概報である。左岸地点の資料の整理作業は殆んど終了しているが, 右岸地点については, 56年度の調査が残っており, 基本的整理を終えた段階にとどまっている。したがってその内容も簡約なものであり, 後日, 追加, 是正を要するところが多々あると思う。

参考文献

- 今井富士男・磯崎正彦 1969 「十腰内遺跡」『岩木山』所収
上野秀一・高橋和樹 1976 『瀬棚南川遺跡』
宇田川洋 1977 『北海道の考古学』2 北海道ライブラリー11
大場利夫・石川徹 1956 『手稲遺跡』
大場利夫・松崎岩穂 1961 『上ノ国遺跡』
大場利夫ほか 1962 『室蘭遺跡』
加藤邦雄 1976 「北海道考古学講座5.縄文時代後期・晩期」『北海道史研究』11 所収

- 佐藤忠雄 1975 『鳥崎遺跡』
- 佐藤忠雄 1978 『奥尻島米岡第2遺跡』
- 齊藤 傑・氏江敏文 1974 『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
- 須藤 隆 1970 「青森県下北郡大畑町二枚橋出土の土器・石器について」『考古学雑誌』 第56巻第2号所収
- 瀬川秀良 1972 「北海道奥尻島南部の海岸段丘」『北海道教育大学紀要』第2部B所収
- 高橋正勝 1980 『アヨロー恵山文化の墓一』
- 千代 肇 1956 「北海道奥尻島遺跡調査概報」『考古学雑誌』第41巻第2号所収
- 千代 肇 1965 「北海道の縄文文化と編年」『北海道考古学』第1輯所収
- 中村五郎 1973 「北海道南部の縄文式土器編年」『北海道考古学』第9輯所収
- 名取武光・峰山巖 1958 「入江貝塚」『北方文化研究報告』第13輯所収
- 名取武光・峰山巖 1962 「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』第17輯所収
- 秦 光男・矢島淳吉 1970 「奥尻島めぐり」『地質ニュース』No191
- 林 謙作 1965 「縄文文化の発展と地域性 2. 東北」『日本の考古学』Ⅱ所収
- 文化財保護委員会 1953 『大湯環状列石埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 松下 亘 1969 「縄文後期文化・北海道」『新版日本考古学講座』3所収
- 峰山 巖 1968 「恵山式土器」『北海道考古学』第4輯所収
- 山田 忍 1978 「青苗遺跡の土層構成と遺跡の関連について」『青苗遺跡発掘調査概報』所収
- 吉崎昌一 1965 「縄文文化の発展と地域性 1. 北海道」『日本の考古学』Ⅱ所収

IVc



1

Va



2



4



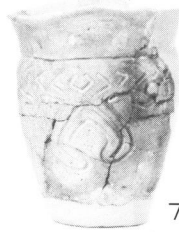
5



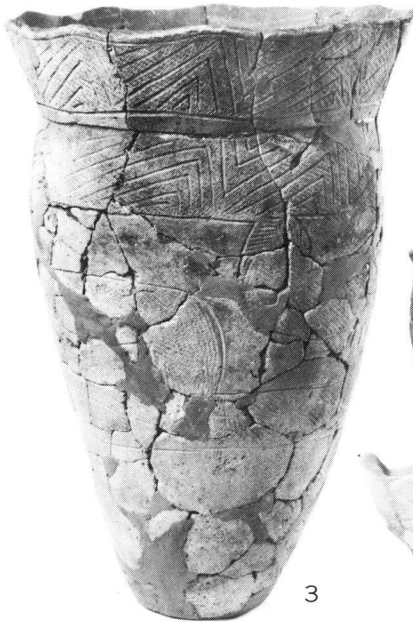
6



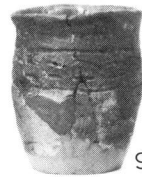
8



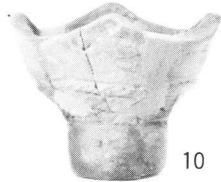
7



3



9



10



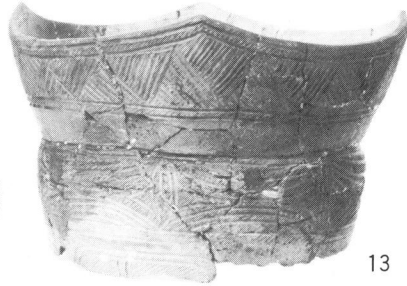
11

第12図版 川口左岸地点の出土遺物 土器 (1) IVc, Va海砂層出土の土器群

Vc



12



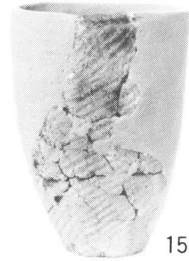
13



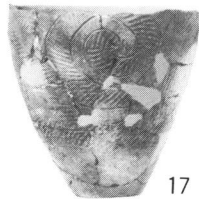
14



16



15



17

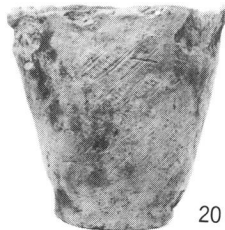


18

Vla



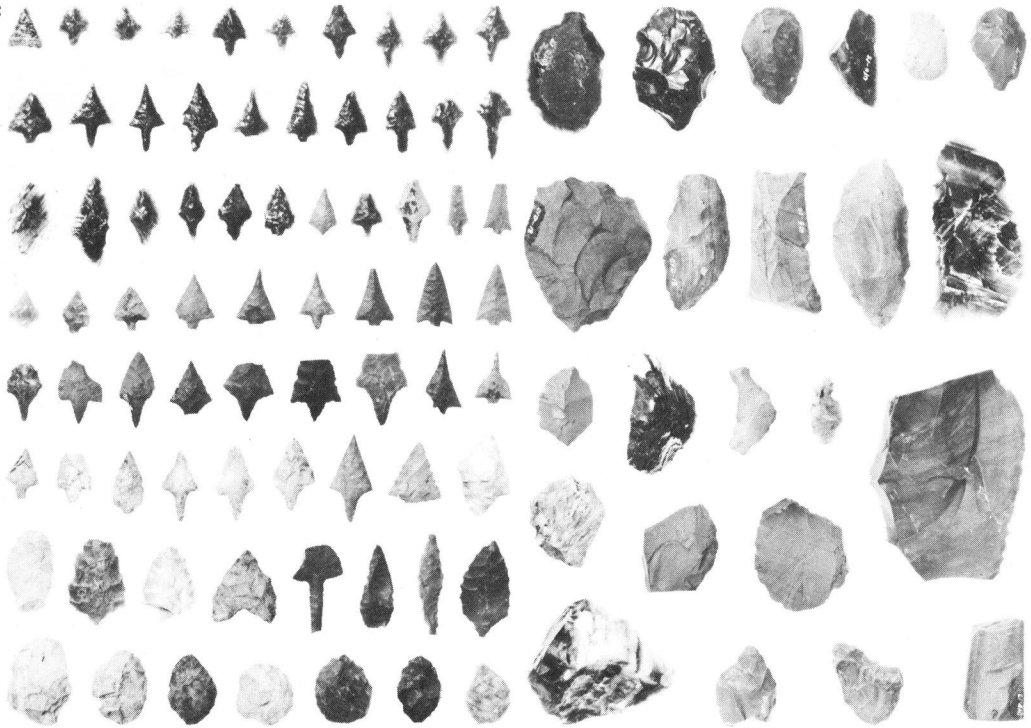
19



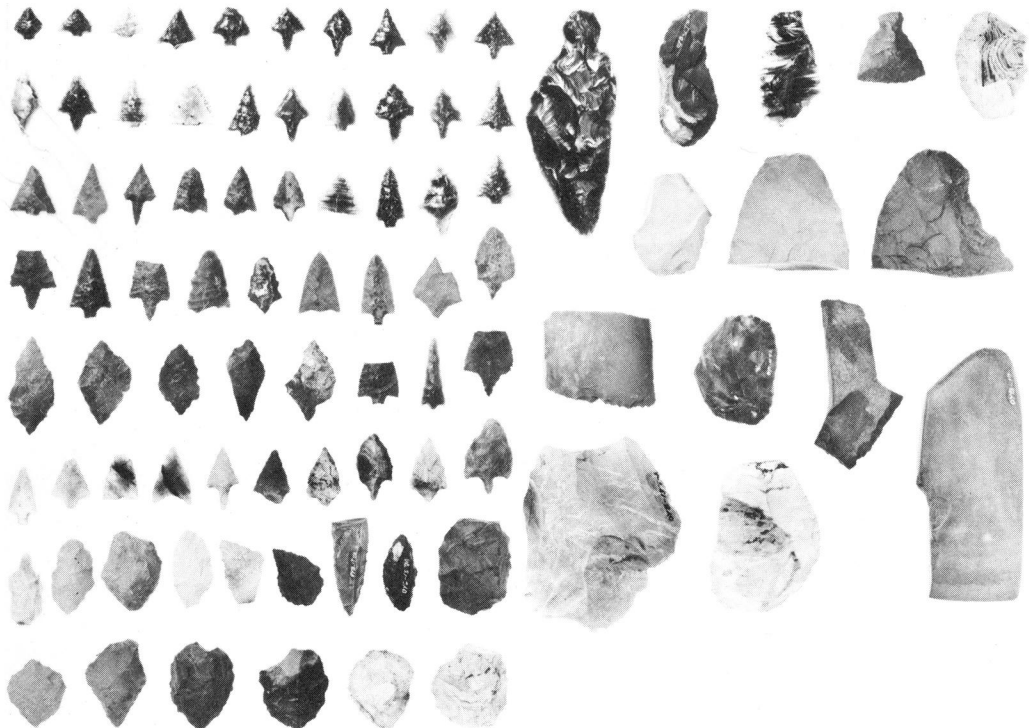
20

第13図版 川口左岸地点の出土遺物 土器(2) Vc, IV a海砂層出土の土器群

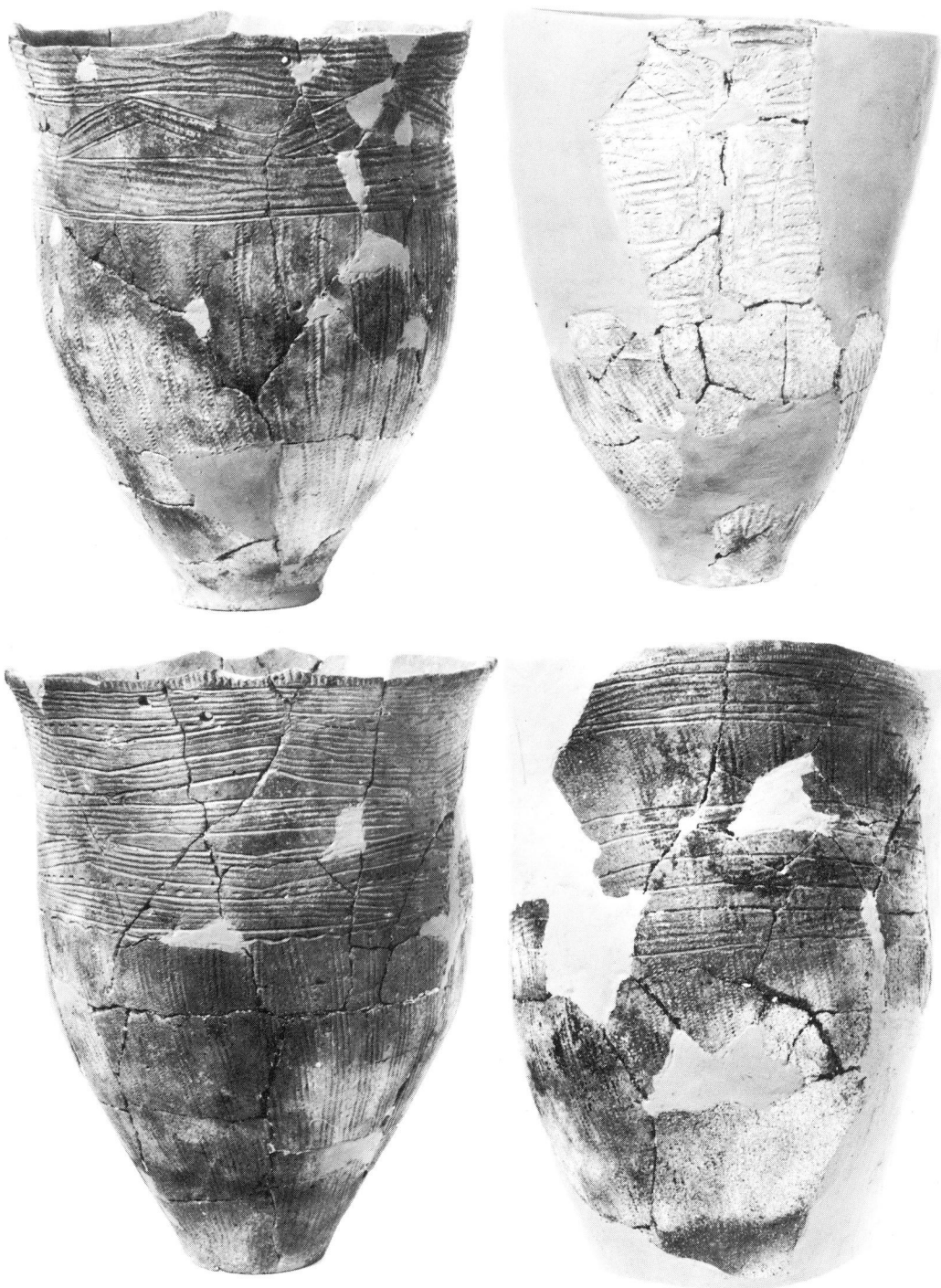
IVc



Va



第14図版 川口左岸地点の出土遺物 石器 IVc, Va層出土の石器群



第15図版 川口右岸地点の出土遺物 土器

やませとまり
奥尻島東風泊遺跡

——道々奥尻島線整備事業に係わる記録保存の発掘調査概報——

発行	1981年3月
編著者	佐藤忠雄
発行者	函館土木現業所 奥尻町教育委員会
印刷人	三栄プロセス株式会社 札幌市白石区菊水4条1丁目